Create Dreams

こども 夢・創造 プロジェクト

2017年度 第3期 参加者募集!

こども新聞記者 活動報告

「こども 夢・創造プロジェクト」は、さまざまな分野の「プロフェッショナル」を講師にむかえ、小・中学生のあこがれの分野や技術、作品づくりなどを本格的に体験できるプログラムです。プロフェッショナルの世界を実際に体験する貴重なチャンス!「おもしろそう!」「やりたい!」その気持ちがあればOK!自分の新たな才能に気付くかも!?どんどん参加してみよう!!

Dreams 04 「水の化学」 ～水質分析や水の浄化実験～

水に溶けている様々な物質を分析しよう

「オリジナルキャラクターでクレイアニメを作ろう!」 Dreams 03

粘土で作ったキャラを動かして撮影しよう

「こども新聞記者」

記者体験 緊張するなぁ～

最終回では実際に外国人を文化遺産へ案内します。

「英語でガイド!」 ～大阪の知られざる文化遺産を外国人に紹介しよう～ Dreams 02

「大体大DASHスポーツ・ラボ “巧みなボールさばきを身につけよう!”」 ～めざせ、未来のスーパーアスリート～ Dreams 01

カラダとアタマをフルに使いボール操作の技術を学ぼう！

協力

読売新聞

「こども　夢・創造プロジェクト」は
大阪市と民間企業・団体の協働により実施しています。

実行委員会（2017年度） 実行委員長 今西幸蔵（神戸学院大学人文学部教授）

AKARU PROJECT　大阪芸術大学 Osaka University of Arts　大阪市

協力団体（2017年度・順不同）

読売新聞／大阪芸術大学附属大阪美術専門学校／一般社団法人 分析研修センター／大阪成蹊大学・大阪成蹊短期大学／エール学園／大阪体育大学
大体大DASH（Daitaidai Athlete Support & High Performance）プロジェクト／ECCアーティスト美容専門学校／株式会社 よしもとクリエイティブ・エージェンシー
大阪マラソン組織委員会／清風情報工科学院／アナ・トーク学院／特定非営利活動法人 書道スーパーキッズの会／大阪バイオメディカル専門学校／重山建築研究室
建築初歩教育研究会／辻調理師専門学校／（株）ワオ・コーポレーション WAO!LAB／（株）エンジンズ キッズプロジェクト／6（rock） woodworks & life
大阪市こども青少年局

1週間、無料でご自宅に。

フリーダイヤル 0120-4343-81（ヨミヨミ ハイ）
受付時間：平日 9:00～21:00　土日祝日 9:30～17:30

お近くのYC読売センターへ
おためし読売新聞

おためし読売新聞

お客様の個人情報は、読売新聞社及びお客様の地域を担当する読売センター（YC）が共同で取得・管理し、配達・集金業務の遂行、各種サービス・イベントのお知らせ、ご購読の延長・再開のお勧め、YC及び読売グループが協力する・提携する企業等の商品・サービスのご案内、宅配業務などに利用させていただきます。

2017年度 こども新聞記者 活動報告

大阪マラソンで優勝したギラガブル選手 山川記者撮影

大会前日、ゆるキャラも登場した会場 中川記者撮影

今回の「こども新聞記者」を体験したのは、小学5年から中学1年までの男子3人、女子4人の計7人です。読売新聞も協力し、全参加者が募金に協力するチャリティーマラソンとして行われる「第7回大阪マラソン」を取材しました。

大会前日の11月25日には、大会を盛り上げる「チャリティーアンバサダー」の1人で、チャリティー・オークションに参加したロンドン五輪背泳ぎの銅メダリスト、寺川綾さん（ミズノスイムチームコーチ）を取材しました。

当日の同26日には、車いすマラソン男子で初優勝した吉田高志さん、第3回大会からチャリティーアンバサダーを務めている元プロ野球阪神タイガースの赤星憲広さん（野球評論家）、そして、完走した市民ランナーの皆さんからお話をうかがいました。大阪市長として初めて大阪マラソンに挑戦し、6時間30分14秒で見事に完走した吉村洋文市長にも取材しました。

取材に応じて下さった方々をはじめ、運営面でご協力を頂いた大阪マラソン組織委員会事務局の皆さん、本当にありがとうございました。

（文中の肩書き、年齢は取材時のものです）

次回の大会案内が表示されたゲート 山川記者撮影

【小学5年】

加藤 理実（かとう りみ） 記者

喜多 ほのか（きた） 記者

中川 崇（なかがわたかし） 記者

納村 美優（のうむら みゆう） 記者

【中学1年】

池田 泰誠（いけだ たいせい） 記者

笹部 日麻莉（ささべ ひまり） 記者

山川 晃平（やまかわ こうへい） 記者

活動報告❶

「一生懸命にやってきて良かったな」

車いすマラソン優勝　吉田　高志さん

車いすマラソン男子に出場した吉田高志さん（39）（大阪府和泉市）は、3回目の挑戦で初優勝を果たしました。記録は1時間33分2秒。スタート直後からデッドヒートを繰り広げ、ゴール直前でわずかに抜け出た吉田さんが栄冠をつかみました。7人のこども新聞記者たちは、ゴールした瞬間の気持ちや競技用車いすの特徴などを聞きました。

車いすマラソン優勝の喜びを語る吉田さん

車いすで記者会見に臨む吉田さん

「今まで車いすマラソンをやってきて良かったこと」を質問したら、「こうやって君たちと会えたことかな」と答えてくれました。「一生懸命にやってきて良かったな、と改めて思っています」とおっしゃり、私もうれしくなりました。　【笹部記者】

優勝した吉田さんは、中学生のころから車いすに乗っています。めげそうになったことはありますか、という質問に、「ありません。車いすになったからこそ、逆にいろいろなところに行くことができました」と笑顔でお答えになったのが印象的でした。　【山川記者】

車いすは腕で車輪を回すので、腕の力が必要だと思い、特別な練習をしているのかどうか聞きました。とくに筋トレなどは行わず、実際にロードで坂道などを走るなかで鍛えていくそうです。真剣に答えてくれてありがとうございました。　【納村記者】

吉田さんの説明は説得力があって、全てが分かりやすかったです。転倒した人のことを心配するなど、すごく優しい人だということが取材で分かりました。心に余裕があって、優しくて、私たちの質問には何でも答えてくれて、本当に良い人でした。　【加藤記者】

競技用の車いすに乗るのは、私だったらこわいですが、実際に走っている人は不安にならないのか、お聞きしました。「下り坂はこわいと思ったこともありますが、逆にそのスピード感と風が気持ちよくて楽しいと思えるから、今もやっているのかな」というお話でした。私も吉田さんと同じ風を感じてみたいと思いました。　【喜多記者】

ゴールテープを切った瞬間を聞いたところ、「（デッドヒートのため）ゴールの直前でテープとは別の方に突っ込んでしまい、実は切ってないんですよ」と意外な答えが返ってきました。でも、優勝できて気持ちがよく、とてもうれしかったそうです。　【中川記者】

競技用の車いすの特徴をお聞きしたところ、「速く走れるように工夫したり、軽くなったりしている」ということでした。普段使っている車いすは車輪が二つしかないのに対し、前輪があって三輪車になっているほか、軽量化を図っているそうです。　【池田記者】

ゴール直後、優勝した吉田さん（右）が2位選手と握手

Charity Ambassador

チャリティー アンバサダー

チャリティーマラソンの大阪マラソンでは、チャリティーアンバサダー（大使）と呼ばれる著名人がチャリティ文化の普及に力をいれています。こども新聞記者たちは、今年の8人のアンバサダーのうち、水泳と野球の世界でそれぞれ名をはせた寺川綾さん、赤星憲広さんのお二人に、大阪マラソンへの思い、現役時代の思い出などを聞きました。

原稿を書く記者たち

寺川さん（左）が出席して行われた記者会見

活動報告❷

「励ましの言葉を熱く伝えられるようになりたいです」

チャリティーアンバサダー　寺川　綾さん

昨年に続いて、チャリティーアンバサダーを引き受けた理由について、「大阪に恩返しがしたいから」と答えてくれました。私も寺川さんのように目標を持ち続けて努力し、今持っている夢をかなえたいなと思いました。そして、寺川さんのように大阪に恩返しできる人になりたいです。もしも私もなれたら、もう一度、寺川さんにお会いして話がしたいです。

【笹部記者】

2013年の世界選手権（4×100メートル）で寺川さんが出した日本新記録は、今も破られていません。その時の気持ちを聞くと、「あの記録を出せたのは、第一泳者としてできるだけ速く帰ってこなければならない、と思ったから。メドレーリレーだから出た記録であり、チームの力が自分を速く泳がせてくれたのだと思います」と振り返って下さいました。

【山川記者】

上手に泳ぐコツは、第一に「毎日練習すること」だそうです。そのうえで、プールに入る前に鏡の前で自分の泳ぐ形を見て、おかしくないかどうか確認することだと教えてもらいました。「先生や友達に見てもらい、アドバイスをもらうのもいいですね」と話していました。

【池田記者】

背泳ぎで数々の成績を残している寺川さんに、初めて世界大会に出た時の気持ちを聞きました。「中学生になり立ての頃かな。緊張していたうえ、アナウンスも何もかも英語で大変でした。とにかく英語をちゃんと話せるようになりたいと思ったのを覚えています」。今の私と2、3歳しか離れていない年で、外国の大きな大会に出場したというのがしょうげき的でした。【喜多記者】

続々とゴールするランナーたち
加藤記者撮影

話していた一つ一つの言葉に感情がこもっていて、取材していてとても分かりやすかったです。いちばん心に残った寺川さんの言葉は、「一日にこれだけ練習すればオリンピックに出られるというわけではない」というものでした。私は、これだけあればいいという練習量があると思っていたけれども、練習量だけでなく、気持ちが大切なことを改めて知りました。【加藤記者】

試合の前に必ずやることを聞きました。泳ぐ1時間くらい前におにぎりを食べるそうです。「食べると気持ち悪くなる選手もいるそうですが、私は食べないと元気が出ない選手でした。ちなみに、大きな大会の前日には必ずお好み焼きを食べます。大阪人っぽいでしょ」と笑って答えてくれました。

【中川記者】

寺川さんが目指している人は、元プロテニス選手で、同じスポーツキャスターの松岡修造さんだそうです。「『（君なら）できる!』という励ましの言葉で有名ですが、私も選手の気持ちが分かり、熱く伝えられるようになりたいです」と、目をきらきら輝かせながら笑顔で答えてくれました。【納村記者】

寺川綾さんのプロフィール

1984年大阪市出身。3歳から水泳を始め、中学時代に頭角を現す。2012年ロンドン五輪100m背泳ぎで58秒83の日本新記録で銅メダルを獲得。2013年に競技活動から卒業し、現在は後進の指導にあたりながら、スポーツキャスターとしても活躍中。

Nice

取材後、寺川さん（左から4人目）と記念撮影する記者たち

活動報告❸

「沿道の人々の応援が後押しとなり、一生懸命走れるのだと思います」

チャリティーアンバサダー　赤星 憲広さん

記者の質問に答える赤星さん

大阪マラソンと野球の似ている点をお聞きすると、「野球選手の場合、たくさんのファンの声援が後押しとなって、いいプレーにつながります。僕も阪神甲子園球場ではそうでした。マラソンのランナーも同じで、沿道の人々の応援が後押しとなり、一生懸命走れるのだと思います」ということでした。私も実際に沿道の応援を見たことがありますが、すごい熱気でした。大阪マラソンというイベントを通じて、大阪の人々がより団結し、より盛り上がっているように思います。これからも変わらず盛り上がり続けてほしいです。　【喜多記者】

赤星さんは、打席で集中力を高める方法として、常にポジティブに考えることを教えてくれました。「絶対にマイナス思考にならないこと。いい結果が出るというイメージをしながら打席に入り、仮に結果が出なくても、その時はその時で反省すればいい」と前向きに考えていたそうです。　【山川記者】

野球を始めたきっかけを聞いたところ、「小さい頃は水泳とサッカーもやっており、（一つに絞り込むときに）どれを選んでもおかしくはなかったのですが、両親とも野球が好きで、最終的には『野球をやらないのか』と父親から勧められたのが大きかったですね」と答えてくれました。盗塁王やゴールデングラブ賞、ベストナインなど、現役時代に様々な賞を取ってきた赤星さんですが、いちばんうれしかったのは、プロ野球選手で社会貢献活動をやってきた人に与えられるゴールデンスピリット賞をもらった時だそうです。　【納村記者】

ゴールで選手を待ちかまえる報道陣
喜多記者撮影

赤星憲広さんのプロフィール

1976年愛知県出身。2001年阪神タイガース入団、1年目に盗塁王と新人王を獲得。セ・リーグ記録となる5年連続盗塁王に輝き、ベストナイン2回、ゴールデン・グラブ賞6度受賞。2009年試合中のダイビングキャッチで脊髄を損傷し、現役引退。現在は野球解説者として活躍。

ドラフト会議で自分の名前が呼ばれた時の気持ちを聞きました。プロ野球選手になるのが夢だったので、指名してくれる球団があればどこでもよかったそうですが、「阪神という人気球団に指名してもらえて、不安もありましたが、とてもうれしかったのを覚えています」と振り返ってくれました。現役時代に一番うれしかったのは、2003年と2005年のセ・リーグ優勝で、たくさんのファンの方が喜んでくれた御堂筋パレードが心に残っているそうです。　【中川記者】

5年連続で盗塁王になった赤星さんは、現役時代、盗塁した数だけ、車いすを病院などに贈っていました。その理由が心に残っています。小学生のころ、母親が病気がちで入院することが多く、お見舞いに行った時に病院に車いすがあまりないことを初めて知ったそうです。プロに入ってから、足に障害のある方にファンレターをもらったこともあり、寄贈を始めたということでした。この日、私たちの質問に丁寧に答えてもらえただけでなく、最後は一人ひとりにサインをしてくれました。本当に赤星さんはいい人だと思います。　【加藤記者】

小さい頃から走るのが得意だったのか、気になったので聞いてみました。「短距離に関しては、小さい頃から速かったので、運動会ではヒーローでした。一方、持久走は苦手でしたが、中学、高校と、だんだん走る練習を重ねるにつれて、そんなに苦手ではなくなっていきました」と話していました。【池田記者】

最大のライバルが誰だったのかという私の質問に、現在の阪神監督、金本知憲さんの名前を上げてくれました。金本さんが広島からFAで移籍してくる時、赤星さんはレギュラーとして活躍していましたが、同じ外野手ということもあり、「選手としてのタイプは違うけど、頑張らないとレギュラーのポジションを取られると思いました。ライバルは、他のチームというよりも、同じチームの仲間の中にいましたね」と振り返っていました。　【笹部記者】

真剣な表情で取材に臨む記者たち

記者たちとの写真撮影に応じる赤星さん（奥右から2人目）

吉村市長と一問一答

Q：大阪マラソンをなぜ走ろうと思ったのですか。【笹部記者】

A：大阪の知事も市長もまだ出たことがないので、ちょっと自分でやってやろうかな、と思ったのがきっかけです。

Q：完走した感想は。【加藤記者、喜多記者】

A：初めてのフルマラソンで、途中で何回も辞めようと思ったのですが、くじけずに本当に嬉しかったです。頑張ればできるんだな、と思いました。自信が付いたので、これからも仕事を頑張ろうかな、という気持ちになりました。

Q：からだは痛くなりませんでしたか。【納村記者】

A：35キロ地点で太ももの付け根に激痛が走りました。足をひきずりながらも完走することができたのは、沿道の人の応援のおかげだと思います。

Q：万博誘致に向けてPRはできましたか。【山川記者】

A：そうですね。沿道の方も2025年万博の旗を持って応援していただけました。ぜひフランスなど他の立候補国に勝って誘致したいと思います。

Q：事前にトレーニングはしましたか。【池田記者】

A：いえ、時間が取れず、出たとこ勝負でやったのですが、最後は足が動かなくなりました。普段からのトレーニングが大事なんだな、と走りながら思いました。皆さんも、普段からお勉強を頑張って下さいね。普段からの予習、復習が大事ですよ。テスト前だけ、わぁーっとやっても無理ですから。

Q：大阪市内を走ってみて、どんな感想を持ちましたか。【中川記者】

A：車ではなかなか見られない景色を見ることができて、新たな発見がありました。皆さんにも、歩いて大阪の街を見てもらいたいな、と思います。

質問に答える吉村市長

右上：完走して笑顔を見せる吉村市長
下：記者の拍手で迎えられる吉村市長

活動報告❹

Citizen Runner
市民ランナー

第7回大会では、約3万2000人のランナーが大阪の街を駆け抜けました。こども記者たちは、フルマラソンのゴールとなるインテックス大阪で、完走したばかりの皆さんから、ゴールを果たした喜びの声を聞きました。

2人の友人と参加した松原さん（右）
山川記者撮影

松原久美さん（34）（兵庫県西脇市）は、2人の友人と一緒に「ダイエットとストレス解消のため」に参加しました。映画「魔女の宅急便」のキャラクターをイメージした服装の松原さんは、大阪マラソンの良さについて「年齢を問わずに楽しめ、知らない人と出会えることです」と話していました。【池田記者】

完走した納村さん
笹部記者撮影

納村昇治さん（42）（大阪市）は、「子どもたちに自分の頑張りを見てもらいたくて」参加しました。「37キロ地点で太ももの裏がつりそうになったけど、とても楽しく走れた」とうれしそうでした。実は納村さんは私の父です。疲れているのに取材を受けてくれて、ありがとう、お父さん。【納村記者】

イチゴ柄のウェアでゴールした清水さん
喜多記者撮影

清水満子さん（56）（京都府宇治市）は、イチゴのキャラクターをイメージし、手作りのイチゴ柄のウェアで走りました。「作るのに3週間かかりました。結構、むずかしかったですよ」と笑って話していました。【加藤記者】

初の大阪マラソンで完走した浜本さん
池田記者撮影

「アメリカファースト！」。トランプ米大統領のマスクとサンタの格好をして走ったのは、浜本幸夫さん（54）（広島市）。第1回大阪マラソンから応募してきて、今回初めて当選して走りました。「沿道の声援をもらえて励みになりました。また参加したい」と言っていました。【山川記者】

ポルトのポーズを決める木原さん
納村記者撮影

うさぎの耳を付けて完走した木原あずささん（27）（兵庫県姫路市）に、「どうしてそんな格好で走ったのですか」とたずねたところ、「家族や友達が見つけやすいし、『うさぎちゃん、がんばれ！』と言って応援してくれる人がいるからです」と教えてくれました。とっても優しい方でした。【笹部記者】

目立つ姿でゴールした長田さん
中川記者撮影

長田護さん（57）（大阪府枚方市）は10回以上、市民マラソンに出ていますが、大阪マラソンは初めて。やっと当たりました。タイガースのユニホームを着ている理由は「目立ってテレビに映りたいから」だそうです。【中川記者】

カニとミニオンでにぎやかな緒方さん
加藤記者撮影

今回で4回目の大阪マラソン参加となる緒方誠さん（40）（大阪市）は、カニのかぶり物にアニメキャラクターのミニオンを縫い合わせた格好で走りました。カニにしたのは「6月生まれでかに座だから」だそうです。縫い合わせたのが誰か、気になったので聞いてみると、「今年結婚した奥さんです。これまでは自分でつけてました」とうれしそうに答えてくれました。【喜多記者】